繪本月宵鄙物語

三

遠13
1799
3

遠13
門
號 1797
巻 03

東京 三丁目十三番地 門波屋

源氏物語巻之二

第十 賢木

信濃なる浅間の沙の さらさらに ひろひ集めん 読人不知

曽我物語

さのくにに浅間のくにあらはらくなるまさごはらくなるまさごは神

梶原景季

し巻にこれ二所とぞ書とし〜く。鎌倉殿三原箱根より夏狩しのひ。海野の籠にて長者の子ちとせ木綿刈乃猟乃乱乃遊あり。弓を引よ扇を結りしるべ。まかり自

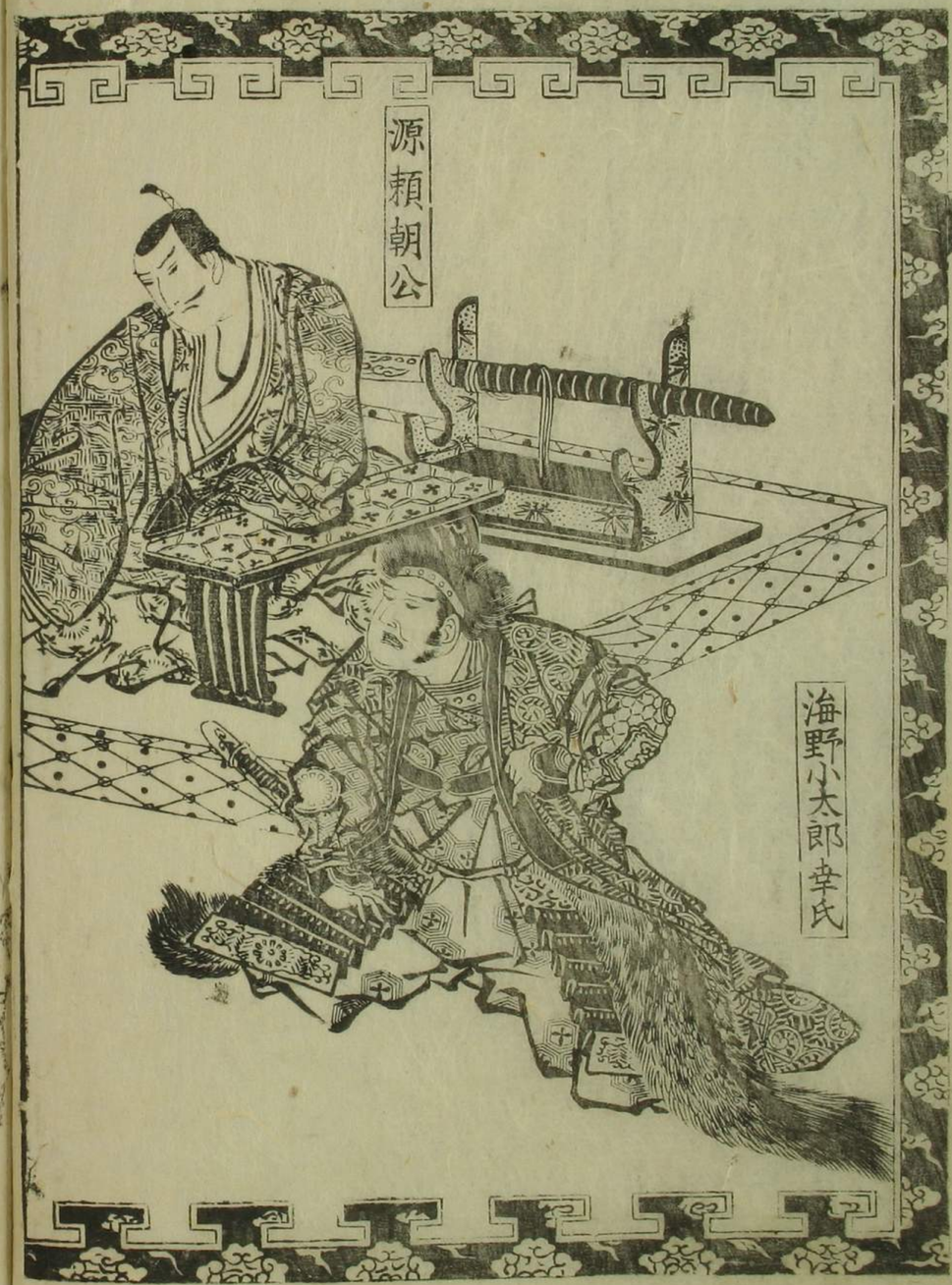
貪欲慳貪長者の子の草履を作りしること。又寂莫村上孝子の作とて椎夫。椎樹の杖をとりて出家

なる涙を浮。母子ともに悲びしう結句袖とぬしるべ

曲川に流れて。身投る女を救ひ助る長者も。郡の

其外も恵の雑なあひ。女の草履をとれ遠〜く戻るなり

恵者若たづくりをとゝ作りなり。


源頼朝公
海野小太郎幸氏

源頼朝公
弓太郎

月雪鄙物語巻二

江戸　四方歌垣主人著

三原野の牧狩

斯て弥生半ゝ成しかば。鎌倉殿信濃國浅間山の麓なる三原園原ゝ御旋猟有べき由用意頻ゝて梶原平三景時ゝ仰せて多く狩猟ゝ練しける輩と。石集めさせられひろる中ゝも弓馬ゝ達し。又御隔心なき族廿二人と撰れ各弓箭と帯せしめられ其餘八縦ひ萬騎ゝ及ぶといふとも文ゝ弓矢と持べからざる。唯駑馬流鏑馬ばかりと捉てさせられひろる人々なれば江馬殿里見殿と初めて和田ゝ藤畠山等月海野すべて人々。今度の曠ゝ装ひ。色々の狩衣の袖ゝ春の風向の幣袋ゝ花の薫ふ翻へさせ。星月夜の明行程ゝ鎌倉山とは進發あって四月廿日しかゝる上野信濃の境なる碓氷の峠と打越て長倉の牧ゝ足揃へ。浅間

が山嶽の据野とさして牧方の列卒打ち拉ぎて牧ゝ立りぬ。うる同ゝなる風の炎燃まさる。煙四方ゝひろがりゝ空ハ曇周ゝ放て雨忽ゝ降来ねれば山巨徒の仮遊ゝ立ゝ中せし立駐て出料理ハ幣ハ幣掛の仮屋ゝ入せられへ。もみげ保く特入る人々ハ出仕も續きぬ。松の下陰ゝ走り迎て実五位の冠もそゝうねらんばかり濡ゝ濡れのとこそひられへ。ゝ新ゝも濡しそゝ。あれ面ハつるゝ風さへ高風ゝ吹風ゝて綾葦ハ立もたまらぬ。特衣の袖も傍月笠ゝ綾り敢び地面ゝ西ゝ行ゝ小養ハ具ゝて牧面人走り廻りそれ石せんと配り行と。あれ見ハ行者ゝ。ゝ特者ゝ。ゝ仕屋の者ゝ。ゝ特者ゝ。ゝ仕ゝ。ゝ芸ゝ。ゝ特ゝ。ゝ人ゝ。ゝ者ゝ。ゝ遅び配り行。初ゝ仮屋ゝ入て後ゝ出前ゝ出て有しやゝと言上ければ猛気成ゝ石て其仕屋ゝ入る者ハ國人ゝ行成者ゝ。ゝ農養圃

笠とさがうハ蓋へりんと。海北の幸氏ゑ尋祢給ひれば。海野が一族
うて幸氏が阪内の豪氏うて越も老実の者ゑ仕ふと言をれば君ゑ宇
比ようて。行沈い陸奥ゑ後ての大國ゑれい給る富有の者も有つぎ給渠
ど今日のたゝひ。物ゑ伝ゆる者ゝゑゆるぞ伝と添てたゝせよゝぞ作ゆる。
流石ゑ夏のすゝひうて雨い夜の間ゑ雷ゆれば。二日の日ハ掛暁ゆゑ出馬とをれ。
三原野をゝてたゝゝゆる。梶原ど恩男源ゑ季ゑ命ゆるゑ独廻しく
して。明日ハ雨ゑ障られて十分の獲ものゆく。陸る出不異ゑ思ゑ案。今日ハ各
涯分の力をゝしゑ柄のかどと能してぞ欲賞ゑ部ゆ出ゆ旅でゝをゝど
味ゆゆれば。義ゆゆゑ出ゆ撰ゝゑ通ゆゆる北條人とけどゆゝして。
関八州ゑ名をゝ高ゆる大小名搏点射殺の勇を振ひ。我劣らじと拵ゑ
ゆ。然ゆ打ゝも又大ゑゆゝて雷ごゆくと鳴出。面ゑの猪ゑ翻れゝ

すゆれば。猪金殿やゞて系季と出るのまゝ人ゆ中ゑ出ゆ。時の雨ハ拭れ
ぬ。今日ゑ人準ば冷ゆゆゆん。拵和ゆゑハ天地とも感ゆゆゆゆ。私ゆゆゆ日ゆ
の風流ゆ時ゑあゆ。ゆゆゆ一首仕て雨と止ゆゆゆと。作ゆゆれば源ゆ辞
ゆ系ゆゆるゑ雨ゆ。義ゆれゝゆゆゆあゝば。

きのふとあさゆハ準ゆゆゆゆ

代て。呼びても取ることなくしいべきよし付さとしが出料ゆえ一ては
長生をもつる物なり。あの狐がおれごとかり連歌も出来ぬ。ちやつ助
けとも出徒あれば。源左も弓おつて。むりり。共附よ大黒小袖毛とるれ
ども二疋の出馬と。今の連分の引出物ゆえ。人よ強いりりは附よりつての面
目揚りあることなつ人よりれ源左が二度ち出欲賞よ取りりることなつて。四ツ所付
続の人々笠。いそは眸よ切らんと勝まん者ハ多りり。中二日よ出るが
嶽の西よめくり。木賊が原ゑれ一。園東山よ三日月の。麿れ出るなりと
まで。是ともつ成物ゆえ。山西ハ總て仕度の長者が野山なれば弓
太郎ハ父よ代りて多くの人夫ゆえ。年。従者の矢六ゆえ出ては
指揮しりりが。むし蕃りゆう草蔭の塚屋のもとよ物ゆえ入れ。貉
り狸の物出せと引年ども。むしゆえ。まりゆうれば。もとの去長蔭

れて。塚穴の中ゆも怪しき物ゆえ。飛出れ物牙黄むゆえ。駆あり。
怒哮眼ゆゆゆゆゆゆ。面損傷ゆる虎のやゆふて大さやく大ゆと
ゆう。火炎のごゆくの息ゆふきちし眼ゆゆゆゆ。牙ゆ噛出りて。ゆう
ばくらりんぞつゆつきゆて。ゆ尾ゆゆゆるゆ振ゆれべや
ゆて二ゆゆれ分れて。斧ゆ霞ひゆりゆめ。弓ゆ部ゆれゆゆて。ゆ金
華猫ゆ移りなり。年ゆ実ばゆゆゆる。飛ゆる猫のへあゆて猫股ゆ成ゆる。
女ゆゆと廷ゆ。翁姥ゆ答ゆる。ゆ沙法ゆゆゆ。一条ゆ坂ゆゆゆゆ。
ゆゆ。くゆ教せゆゆ立て。特技ゆくゆりのべ走ゆれ。怪賊
ゆ岩ゆの上ゆゆゆゆて働ゆ。ゆりて丁ゆ打ゆ技ゆ立て飛ゆると。跳
退て横ゆ。ゆ新ばゆゆ。哮吼て飛ゆ木ゆ弓ゆ部ゆ。ゆけゆと退ん
ゆて。失て去の岩ゆ踏ゆて。ゆ俯ゆ倒れゆ。犬の者ゆ。ゆ云甲斐ゆる。

美濃の国
浅間の禁下
三原野
頼朝公
牧狩あって
猫まるを
あひぐ
伏屋
源金庵

浅間山
三原
ゆせたち

ハ、く逃近てゝ有けゝ。久二ハ初ゝ恐しゝて蔭よりまゝ居る
が。遥よ式体と見て思ふやう。式童何ゝも必定今ハ捨れぬん
ぞるゝ。日比妬まゝしゝつる奴と。よもめゝさで来ゝゝゝと嬉し
くて物も敷さし出さゝ。式時寂莫村の夫の中ゝ本旌の剛化とて去
の主るが。是ハ極ゝる孝行の者ゝて出ゝゝの命ゝるゝも嬉しゝお
と草ざゝ水猥りゝ踏枯さぬ実法の男ゝれば別乗の夫ゝされて物場
ゝハ出ゝぞゝゝ。ゝ多一形返ゝさゝ杖の下ゝ走ゝ来ゝ雄兎ゝとも。鮮と
打ちゝ。しくて返逃ゝてのゝ居しゝゝぶゝして。ゝ怪変物ゝ向ひて身
をあやまちてもあゝゝぶ。独ある母と後ゝ者ゝんゝぞゝ思ひ思ひて。ゝ
の後ゝ立て主ゝるが。今目前ゝ弓左郎ぶゝ物ゝゝゝれんとゝゝと云て
救ゝ者のさゝゝるけれゝ坐ゝ痛ましゝくゝひて。我もあゝゝゝぶ走出て杖引

そゝゝ。一ゝ前ゝ安地義ゝ。ゝ山ゝ。ゝ救ハせ物ゝと唱ゝゝ。彼奴ゝゝ向ゝ
ハ。独ハゝ猛ゝし猫股ゝこの男ゝゝゝゝ思ゝ。ゝ。ゝ。

又えび海野殿は遠ざかりつと引き寄せて鎧どもし
てぞ居る。濱や山陰の山々神の祭りと忍れて私ざゐふ物もなる
ともの色々に綱と引せて藤原の勢仮屋に積て丘をとるせう。曉に
海野が鎧に入せ給ひれば。梶原平三紀藤とうつて今日の出藤と地に
為わるに法金殿の姫御前ひての給ひなるは法世の
壮観実に物凄く和泉。農士の元吉とやが寧三日不食ともに一日も待
せでは叶はじといひんもさるこそ。人くも食と忘れて働きつしがさこそ
固しさらば今青い幸氏の鎧なれば公重事あるべしと解て酒の
吸されよとの給へ間に主人幸氏殿文に徑置して海山の青地金鎧の
器ふ盃沈地の机に肴の盛りもの色々と持出すあり。もうべ。
盃殘くに成て幸氏やうやう若日義仕と仕て出家をとれ

りさう仕度の義只今引幸鎧と纏進仕りてはいかゝ。諸馬引幸の家臣
に新送りはひうんやと何人附に出持懸ぶ繁しく
出去盃給はらんとの給へば幸氏ゐざゝしと茶と立て厨に在る圓左衛門
とゆのびせ給つるよと給れば出者海と立て幸と仕伏せやう思
幾ばくかゝざゝ台余と為りて。御をまひなるべきやうはいかと頼
に癒り歩行難安と出家に出給へせ給へ又あ
るべきことなり孫八郎とくに悴の童と連られてゆ先のやうとも拜ま
せて給へ。ほうはが出家おの死後の教編に満うう伝ひるんぶいく
宇一石作雲孫ひうんやと見入る拾っていへば幸氏うつ驚きていな
れやすれうに我ちてこまと言ふ私の老とひ拾ふ出藤森の万い多ふ
こまりも保さしくれば捨て出ふ給へも苦しかりと餓ふ弓左衛門に湯

あびせ敵を寄せつけず。遠出して簑笠をとりつくろひ。圓太夫が拵ひつらせたる
雪をえらうろうろ。敵を遠くの樂ものとうんかこを拾ふと。痛くくし
こまりて簑笠を脱ぎ捨て。体屈をすると。落合厳内自や弓太郎と。平仰向さを拾ひ
て。出貧人をるる。扇筋を知てきと又上とる。敵こち優笑く。猶経ぎ金和尚を
小和殿を眠を。素奏よび童形を。生きる時。ともくとるまとりかがさんれ
ぐこちふしと。近うよりて。五番目。五番目。五番目

るべしとゝくして懐中より出せば。馬左郎脇差抜きやうるゝて。英淡の
織の人の袴のきれを。伝淡麻の上下をぬぎ。とりかぶるを立あがり。扇
を張るようなりつゝ。自らはとつゝ出て

思へば本城のくら我もまうさをぬぎくの刃を惟ひ人我こゝ絶藝けや
ぬぎけ茶のゝもくさ荷てこゝらふよや

と二度ばかり舞ふ。孫金殿分そびやうと服装よおりうるさうさ
横目出ぬ。拾ひ。打うるびさく見入給へ。掘東工義島山ぬぎ人くも
いとくと優居るぬ。ぬりう舞振の面白さよおびえぬ。数を打て雑さ
れうぬ。郭おりうて上下ぬのぬぎ。ぬり厨まで出ぬれば父の長者は目代の軍
学と酒うちのゝて居うるが。奥ぬ法よう。本うあれい何の御きぬ。
るぬ。豆下の子息ぬ小舞まふて。豆の人てよく選らを張ぬとゝて。

長者殿の時さえ抜うる。蛮さしうさしー我ひん新ぬ舞つゝあと厨の
板敷端唱らしー。優化ぬう舞うぬ。不見ぬ唱ぬ呼ぬ。へつれどぬと
濱らうく親分酒も盗ぬと思われれ。比陸ぬ日下軍学ハ矢六ぬ抜落
ぬ抜ぬうぬ。酒をしひ呑ぬて。軽ぬるハ。和男も出て見知りう寂莫村
の別化ぬ。ぬ整夫ぬ我ぬ。ぬ敵ぬ夫ぬ見て。ぬ。ぬ特別化ぬ
ぬ。ぬ。ぬ。

ようと物語らんとまろ同じ弓大郎出羽とうを出て夜六とる夜れば打あ
ゝ立ぬれぬ山寺ゆくに月代ハ海野の家に入今ふるかしらうて接金様は
別てさらく〳〵弄振れば幸氏もよさ男ハつゝ思ひて左源金の宿る
の間ハ物ゆるすも寄任せて寄られば多勢行ひろ。扨も南北の特倉
今ゴ二日も育ぐりしと俄に西ゝ〳〵あるこれより上野国の草津の
温泉と賢人指ひ。宝ゴ下野の那須野と物せ指んと。ゆれば幸氏ゞ海野
の銭と立出させ指ゝ山ゞ〳〵も弓太郎出帳ゞ出ろと出賢人ゞあるゝ
硯系〳〵せゝと作て雲初物呉さ〳〵めして我物指ひる扇ゞ指やらゞ
くゝとひせ指ひてゞ夜の弄の引出初ゝ。
縁金ゞ指て来れて。投きり〳〵たびゝれば。押いゞきて顧寄とゝ人〳〵
ざゝ〳〵と雲余〳〵ゞやゞ立馬ゞ〳〵ゞ。投千騎の江代高嶺と闘続〳〵

きりゞ弓ゞ津とさゝており〳〵ゞゞとゞく〳〵て温泉あゝ指ひて下野へ出指ゝ左ゝ
同笠数系〳〵ゞゞ〳〵て赤木山さゝゞふつゝ〳〵ゞゞ〳〵し口花ゞせ指ひれ
れゞ原先ゞ。ゞ〳〵ゞの人ゞさゝやゞゝん。ゞゞて武蔵国玉川七郎と指ゝる
ゞ山河のゞ〳〵ゞゞ。後ゞゞ伏人さゝえる。長者親ゞゝ山跡と迎ゞ〳〵伏拝ゞ居さ
りゞる。父ハ我ゞゞ射ひて縁ゞ指婦ゞゞ超さ指ゝる山物ひゝる。ゞ〳〵
ゞ〳〵さゞゞゞ。皆ゞ熊ゞ〳〵。汝ゞ果報のゞでゞゞゞ。今ゞゞ妻の存命て
ゞ収ゞゞゞゞ〳〵。嬉〳〵さゞゞゞゞゞゞゞ。ゞゞゞゞゞゞゞ。
〳〵ゞ指ゝ〳〵ゞ扇ゞゞゞゞゞゞゞゞ。ゞゞゞゞゞゞゞ。
其外ゝ細骨ゞゞゞ。ゞゞゞゞゞゞゞゞ。
ゞゞゞゞゞゞゞゞ

かるる山賊の仲とも。驚るる玉よりどけ人させ給ひんうどけ人さよ。猿
食へりて手れ〳〵作せつるよ。やうこそあ〳〵ぬ。仍まれ毋刀自よ〳〵ぬ
せて悦ぶ事ぬ。月ぬ〳〵て物ふ見乳よ苦出てうひておいとれ。足と見ん
狂ぐ矣狂ていうでうれし〳〵ぎさらん。我よ立〳〵も汝い孝行の者多り。
りう〳〵我と云れてその扇と浮く。あふぎ立て渡りるぶ仏身て痛所体面
や〳〵押ぬて物よ押一色〳〵弓太郎とり連て。我家とさ〳〵ぞ帰る。此者
ぬ悦勇むふ引ぬて軍字矢ぬの雨人ハ。物はりて事果れば別他
と考べき孫も有遠〳〵。已ぬるぶぞ賜の上ぬ〳〵よ。夫の者と罵ぬりぬ者
法るとサ〳〵。高りちとて別れり。長者ハ家ぬ入りや遣〳〵と毋刀自
の前よ出。山四五日和ぬ〳〵よ夫役ぬ〳〵づひて家よ〳〵ぬ。さて家〳〵う
物〳〵ぬ。物悦ぶ事ぬ〳〵こ有〳〵。ぬ立郎ぬ山ぬ立れ立ぬ〳〵ぬ。有

の件のるの紙法りて彼山扇を懐よりぬ出。恭敬物ふ考えて毋に拝ま
れバ。刀自事もるぶふ取て打返〳〵ぬ。ゆし〳〵吃声よりてやれ件
頭倉食の法引出物とやらんハ足斗ぬ。粉時苗ぬ〳〵ぬ田畑踏ぬ
さる〳〵さ人有を。ぬれ法物餉ぬ〳〵ぬ。ぬれ列卒餅なれと。ぬ人の食物
を夜豆物運ぶ。我ぬいくそぶくの費沢こせ〳〵れ。責て多ぶはー〳〵も。
五十町百町の田所ハ法ぬ〳〵ぬ。待かぬ人〳〵ぬふ。是ハ行の料の扇を家
の内の残食ぬ〳〵果て已ぬ化の門ぬ〳〵ぬ。乞食ぬ〳〵ぬ射の扇ぬ〳〵ぬ。痛
時ー〳〵の抜毛や是ぬ〳〵ぬもの者を青び立ぬ〳〵ぬ。物ぬ〳〵ぬ事ぬ
思ひ立て。守護の館へぶり。退従仕ありくこと起りて海壮とのふ
かぬ〳〵れ物ぞ。此後館へ足踏も立る。鎌倉武士ぬ日も又今とぬ。
徳〳〵神仏ぬ治乞家武家ぬ交ぬ。何ぞ事れ抜の者とふぬを年ぬ

らくいんの海野の太郎の館
頼朝公の御前にて長くうにら太郎木賊苅の今様をうたふ
弓太郎

空氣者めと扇をぞ者ぞ面ホ投付孫めも見ま懲くらひまのれるど
仮ふもさ合ら箭木太刀壓折く風呂の下ホぐよ今よりあく見ま街
道の馬追つく債をとり。夜ハ家らの履造りて此度の費を贖へ然
らどハ在地刑とりて勘當せんと此世ふび復立てつを欠六ハそふ晴
くつやく詫言もせと小仙あづくあくは腹立ハさることもめくも流石
ホ長者夜の子息の街をの馬うさ仕終りんハ家の恥辱ホくの形ば。
その方どりハ狂さゆ已給ひるん。といふつゞて男女どもにぐホ涙れば。
刀自ちぶくホ笑うてさふび怠状ちく履物ぞう狂ふせんと。
田畑ま追遣ひ。夜ハ我倩ま置く蘭金剛ぞど作らせう。然ばうの
若者の子はと金銀の中にまふり形ぞふ履物作ること餅ふ
拘ひと刀自をのさ物者のめれば。否むしあり名玄德とりふ

耳垂隙のよりし人も。物をさる業ーてそ本銀ばさられ。今の鎌倉
殿も七人にとりかせぞ出て。天下の富ハ物終れど。他ま拘ふてみま
をーて給ふ物を。倹約ハ己くが寵限ホて。人の上ホ頼ふぬことなれば。
いふホ人若しとて紙ちくも銭今ぶホふぬれが我ハ恥しも男ぞ
めひてをり。益く邪見熾盛ーて男女共の朝夕の娘をもまばら飯ト
ちりてそろふ減ー已拘の欲ーくるれば一間ホ成ホけ籠ーそ仏ま
ん壺のうちよりすふひ上く。打啜ふ人ふ多ぞ八十ホ終くよりぬ三五九
そのようも健ふありけまバ。黒刀自質ハ何國よりも不老ホ死の業成ば
く。孫子ままもふれぞ賢獨くるるホり。それや天全ホ生ま留志安者ば
姉聚君ふうーてと密ま誘惰をちうとん。

更科山の老桂

その隣の郎ある文級山の棟。寂寞とした里まさに一人の老嫗在り。齢七十にもとく況を燈仏を載きさらに母さまそ皺古びたる顔ありふ垂ての老人の様なるも非を色白くて猿氣なく。衣さへ常に白妙のを着よりは一人字して白嫗とはいひけり。此嫗が子なる剛低とはいひける。剛低に一人の男子あり。今年十一にて打の年の産なれがとて。卯吉と唱へ卯吉が母は一昨年世を去りぬれば剛低が身助なる成とて。嫗が姪ふ夕霜とて海野氏の山鼓みなを公して在りを此春離りて後添とはいひけれども。此女も亡せ下ふ若く新るとも勝れく美貌とはいひ公ある者なれば。五十に及ぶ我妻まを似氣なくほ〳〵て幼稚より其の館に育て花奢成とて氏のを目別られど。されば悲憤家に在く老人を助傳。幼者を教育。貞に夫を懐ふ貞操珠さに叶へべうなどと剛低は思ひられが度〳〵母あも其所をいひて辞りしかど我妹の血筋とて八今を渠一人のことてあれ。卯吉が為ふも正に叔母なりよも徒波公を思ひ我もまさ幼さ稚より実の娘と思ひて抱うへてあれ立つが者形れが。なりとも我ふ情ふが汝が手ふ比く似合しかばと云も理りなるぶ世間ふ又なたるふ我も汝が爺ほうへ世餘の妹なりしでし会こそ嘆ぶるやうなれ頻こんよ女ハ呼四五年の間ふさ過ぬる初をとて。母の強く唆入れられが涙ぶ〳〵ふを取ひられど。剛低はとうへ情を矢つられ男なりけるべ女心定我年長ふつうなを厭ひくふ憂ふ思ふなるど。母の意彼らにとてそ逆へ難れ。往ふ似合しに男ふ立て妹ふさく嫁入せんと思ハ籠名れがにぬるう其ハ浩ふ夕霜ハ浩ふ。に潘閑せそ。母の目のあるう半り女夫の様ふて。一向に妹のるふひまそ在行ふ。此ふ霜をかもさく目代の軍字と低借して又人ふ又合せんも

男子編笠むつれ合うし公爵あり年ゆて後逢瀬絶えて徒然あや
淀久。叶里の村ぶれ善太といふる高名の惜打の左々右衛門しう
拙いひうて又それと好あひけるが。剛低が山うばそ生くる跡あくさ何附
も髪化粧ふのを打うつて。焼や子ふ拙食るるもうち忘白地よ
出るやうあて善太紛ゆとて酒のこるどしく遊をう。何地行ぞ若
女の故ゆた出歩ハよあらぬね事ぞ」姫のいくが剛低の庚の逆ひ
かぐ仏ゆとなくて。逆よとて出ふ捉の花の面ふうれば暮れも
ちぶた泳やあく。庚の逢うひしい桜の科ようそ足ふ給へ彼府あて續
ける元せ哥ごひし。と然ちぶに疾いひ紛うせば。焼ハ一向の後世者ふ
く拙疑ひせね本性ふれがさもやと笑く痛侵ゆと濡ふ代。卵吉が
幼仏地ゆも面ふとふゆと笑ひて夕霜がりて寒ひし哥拙結の仮名世紙

ふ仏をられて。余所分のうぐのまうに野山ユ雀子の巣と探り溝河
ゆ小魚の淀うぐふるのもせを家ユのを居ぶらうさく憎生しけ生と。
久霜しを態と繕やく苦く。今日ふ仏ゆまうふを花摘ふ今霜を
拙治がてふ蛍特ゆを行吉をそぐのひて誘出いつも路の間ふ迷ふ
ちく。已ハ善太ぶ家ユ入臥或時ハ我家へも家ユ入れゆんどすれど。
老人も初子も霧ちぶた剛低ふる唯幼子どより教なるれおユ宮仕
て文見ふ後ゆ。ひうる故ゆや自然ユを苦しくあざめてる考ふ
成つふんと兼ても子ふ並つれど。世ゆ男も多ふる中ユ盗人の如き既切心
拙ふる。苦失をしも苦ひ懸く然るるゆ苦しさいうぐうぐうんされか大
ゆこの出歩行をぐ子ね新して母ゆも考ふさ拙過ふう。五月雨降ぐ
れて。剖低ハ山へも往ぐ日比家ユのを在く。母の肩按腰摩手て孝養

もろ紙。外書もものづからこん物なる。何をか色して祖母を悦ばせんと例の善光寺の縁記とう出く。片言はじめてつじを讀こく笑すれば涙を落して悲しび日毎おがくみを淡せこく長雨のつれづれを慰めをる傍よりタ霧ハ矣らしてをり。熟〻、剛低が面を打ちて笑をが若く清気ふ肥太こ彩よ思ひ比ふこよ。こく悪紙仮初こも夫といひ居んハ跡はしたるゆしと。こひて。大方枯をぶらみもいこ。目もこ合ぶ打側向こ。こ森ぐらなれど紙発る者もなし。おくて九四日とつる日の朝の行よろ雨上空霽けれど別低母こちらを由う此九日斗雨こ漳られて山へもえぶ。粮も衛氏くゆくハ今日ハ柴苅こはうぶんを。路も乾きるが仰寺ふまを引せく地蔵治しもくといひ置く例の如く仕成して。斧打うらひて文級山を指こ生行り杵此文級山といふ當國のこ中に高く秀て東西こ横折南北ふ幻ふく。頂を冠が嶽といふ文冠の高子ふ似れがなり。玉と拾ふと よみし千曲川のさぶれ石もまかる斗馬ふこ流見弓ふあハ幡の杜を隔こ。久米路岸川こ通ふ岐ぬり。如法寺山のこなれハ斧の音遠近こ響こく友を結の聲ぬり。別低うちゆこ。我こそ活斗こ高ぶ踏の乾も行ぐ早う寸ちうと思ひつふ他を却て由ひせうけれいでくそ木こ登て木樵ころ〻こ。此別低元来雑こ茂こ樹を伐こ紙厳こ。いろも卧木を摧き拾枝をのこ伐ふれハ山時五月の末こ繁きこ夏山なれハ思ひしよりも枝末ふ小くて繰こ一負みもふ足しぶ特爰ひこと求こ冠が嶽の眺尾ぬる姨捨山ふを到ふれ別低四方を打見廻しそこ思ハ出も姨捨山こ出るこ我年比此文科山こ入て木を樵こ世を渡こと焼拾こいふ名のみこそ。遂ふこれ迫此こふの木萱

をば持ちて行き来もなし勝母の里は轅を返すなりし太夫も。えを賤さ
撫父のりとろ山より山は日ぬ暮さも母を恋ふ孝子ぞし何成る軒忍の妖
なれば老人を此地は持て。国所の恥をさえ永く今の世ふ残しなんめ。情ま
しの山乃名や。あく稼じの木草やと独言して嘆くとゝ云る巌石の
打ゆしが忽薫風半天より吹乱して。えもいそぎ芳きかざの去れば不
図え上ゝるわ指ハ雲ふ入て高きことそう難く。屋を牛も隠ゝ斗の
桂の木の梢より吹おろし来る匂ひもゝ。他文ふ思ひ人なぶ。山頭差桂
吹古香ふこゝも打涌づる光景なれどこれハ桂根の山賊なれ。只
奇岌古木かな一向驚て打ながめ。古年の大雪ゆや翠ゝ久。さも
暫ゝ紅下枝の折下りそ枯果るゞ。風ふゆふあきて今も吹落ねべ此根
なれ。こゝよきあを足分ゝと走登りて伐ゝとゝんと思ひゝゞ。桂埴捨

の内ゝと分つ。此枝衆許の薪ふ成る。此山ハ世ゝ木ハ風し
拝の名も稼じと唾吐ゝて足返りもせを一町餘ゝ下ゝふ。彼桂の
退風麻の袂ふ桂吹来ゝ。分地酔が巡ゝ成ね。其府別他恩思ふ拝我
同業の者ゞもハ生木枯木の用拝もせを。ゝとゝ所も嬉ゝねば撫ゝ
薪の多ゝて。誰を伐ゝも我ハ無ゝ。我ハ無ゝ倍ゝ多ゝれば。親を養ひ子ゝを
ゝ山も我ゝハ安けゝ。家ハ頑ふ此山を忌嫌ひて未撫ゝの狭ゝれ
ば鉢を伐ゝ事も自然ふ来ゝて田ふも常ふ貧き目を見せるハ男ゝべ
却て不孝ゝ。我ハ無ゝ斯愚ゝ。ゝと件ゝ。再びかゝこゝ来ゝ。
斧桂ハ撃賞ゝて斧を取延ゝ。ゝと伐ゝ。ゝ来裂折ゝる枝ゝ。
地響ゝて即落ぬ。その音遠く響ゝ。ひゝ。ゝく幽ゝ人の呼ゝ。
ゝ別他ハ踏ゝる枝を踏ゝて。逆ゝ。ゝ落ゝ。ゝ風ゝ。ゝれハ其声を

善太
一夕雨
剪作
白蛇
十八

笑とぐめど。既ゐ叢の上ゐ落く微塵ゐあるべうし。年来練せ業なれば仕侍宙ゑ跳くり。持る斧と杖ゐ突。高る枝の傍ゑ突し て立るぐまど遠先を折く山祇ゑ向。斧とろく木ばくり。蔦ゐ巻て束るゐ。ゑ人しくるゐ。ゑうるれば怪とぐく思ゐ。ゑうる。突へゐ拾て立六百ゑ彩をあゑし。明日こそまゐて時運ゐ。先ゐくく紅拾ゑ人とて芭ゑ樵ゑ薪の上ゐ一束と打ゑつ。夕日とくもに後ゑ負く。千曲川の波をはてぐ

ぐうまる。

千曳河のさゐれ石

かくて溺ゑ至り朔ゐ実ゑ楽拾しゑ孫舟ゑ荘ゑ。南ゐ送る久風り掉ゑもちゐ流黄舟の中ゑ奬を見れば。杵の横打戦ぎゑも涼氣成下蔭ゑ。打睡居る人あり。剛俊舟を杙ゐ堤ゑ繋う近づく俊ゐ人と見

べ貴布の帷子ゑ。信濃麻の道服うちまう。聖柄のちいさ刀ゑ突。蘭今剛の草履ゑ穿く。年の程六十案ゑ近き翁の。石ゐ尻掛く坐睡たくをる巫。然ゑれば伏屋の長者く。蕭く酒好人と笑つるゐ。痛酔くやおゐとゑ人。幼地紙氣ゐ。ゑ人ゐ。敬るうはゐと甚前をゐ。ゑ送て切ゑ。ゑ人ゐ。苦ゐ。ゑ人ゐ薫ゐ。ゑいひくく目を見しゐる。ゑうるれば。ゑと見遥ゑる剛俊を目ゐくゑ付て。ゑ人ゐ寂莫村の剛俊ゑおゐ。ゑやゐ。行ゑ。ゑ人ゐ立田の腰打ゐ。ゑめて長者ゐ。ゑよくも己を知ゐ。ゑ人ゐ。ゑいふを。ゑ人ゐ。ゑ知ゐ。ゑ人ゐ往古ゐ里ゑ在ゐ。ゑ人ゐ建部の大垣ゐも。ゑ人ゐ。ゑ知ゐ。ゑ人ゐ沙汰ゐる人を。ゑ人ゐ居ゐ。ゑ人ゐ。ゑ人ゐ難ゐ。ゑ人ゐ。ゑ人ゐ。ゑ人

拭ひつゝ長老に向ひて宣ふごとく今日は戦の日和にそなへ異なるよ老者
共まづ従者も連ざ何方へおはしるぞと問ば知るゝ如く洲絵は雲赤の馬市
あるれば此両雲に移る牛馬買まとて芋井の里へ赴るゝ縁は雲赤の馬
國一の四牧あれど異牧よりも細馬の生るといふ。果して今日翁が求めつる
馬も四歳の駒なれば太逞ましく拵ゑて仕り。翁を事
徒が流をも知るべ。伯楽が侍をも不安とも牛馬は相こゝは年比目訓く
仕り。然るに今日こゝる馬。近比の牧より出門服の公達教経殿の相乗
庶毛ふもをきく劣る陳ぜれ拘れば折を紛く縁糸殺るもなるやと思
ひて買取のひ。今おしまくは和をわくせく魂消さるゝを今の世と
越後牛とても男なる曳せく場へ侍り多日の餘りに異るゝ翁へ
暫くて爰るやもうく人侍りしなど拘語ふ。頓て鼻うち鞭やく河風の

打吹度るよれ芸志のする氏。幼を男ひをりしお和その貫くれ薪のうち
ようくあるる匂ひくる。そも何ぞ香木をう樵とくれしと問れて剛作も
げみと仏付ていふ。あの高る山法うそ桂の木の枯枝を取く付ふ心定
それこそとて上荷る者りれ一束孤後まるれて長老よ元もしく取
てさくなる枝を押折くうち喚て。足しくとひつ。欠殘くれ歯と齒
徒りて大きる鬱るれ新宮氏ゆて云やう。呆へれ叡上の桂心のり昔
桂の宮の四前に在る桂仏りも大方劣ざふ。はゝ謀に我国にも桂心
の有る拘を世ふ長秀なれば今まで知ぐ採ざり名れ念すまに奴もこの
一束は弟に代んとて拘るゝ邑を然くば翁に賣くく殺ゝ此比毋刀自が
ゆく長屋の傍に薬種の店ひくれて牛醫師のその似こと仕るが此ふ仏用
る示のとさるも下に新に見れば剛作も驚く参斗功能ある拘も知ぞ

以茅を賣んとそりて来る老なれば。彼の絮に糸くらせん。彼これをよしとく
さぶらふに用となくば皆めぐらもとめんといふ長者甚怪びとくあがく首
を傾て袋より小判一枚を出しくれば。價取給へといふ剛他是を驚て
こは思ひもよらぬ事なりとこたへ一束が薪は馬十疋にも付めぐ山地にある牛只一
束の枯枝は洴芳の代を給りぬんこと左筋なきなり。とかしらを振て
押返すに。再び剛他よあらえて。和主の辞とる所は薪の代に剛が給る
所は茶種のあらひなり。其物よりて價あるも是なり我乞ひもとこと
あるも物不足とおもひ人どもに又明日殘りの桂を買主の上を等双
とふ價を定めおはをそ色とといひ給へば剛他も今桂心の價をあらは
を給るが足編は長者の監定よりて不思議の所得をうとく
屢小判を押裁を頒る長者に怪びを延られば其実法の体が

熟く感入て和ぬ心の深は至孝萬実の人なる。然はこそあの山に入松人
と賞人とあり在中なる。独竹木ふる南山は今く日比の孝心を山祇の
感ぜく。授給ひしものなれとも今世の鄭大尉なりけり。後世に栄
めべしと涙を流して賞給へり。剛他は其日を毋はせず怪びせん
と出懸ひ給へしと又明日こそと立別て堤を修切は下りつ。我
家をさしてそ急々れとかくする間は八幡の隨入相を告く。河の面は
凄くこそ成ぬ。山村多きちこそ帰はこれも公の為ぞ。まれなれと
独ごちて東西桂を携へつ立ぬる堤のもとなる年の程十八九ばかりの
て眉目よりた女の。敗ハ賀花なるが扨思ひは痛くやつれる振まそ額髪
のこぼれかれ目のうちふ涙を深めて。はらはらと水の面をうち字ふ居
なれる長者の歩こ近ぢく。周章て泳る居入んとそれば長者は

桂を投捨身惑をして帯を取くつろがすと見るほどに。それを引放て牲跳り入んと
する処におよびかゝりて後さゝゐを掻抱くとく藺金剛の鼻緒を踏切く
殆ばと倒れんとする処に立寄りて抱とめる女は赦して死なせじと泣
深く又張放さんとすれと翁なをさらに男力をもて。強く引戻して堤
の此方へ連来る車の中より成尋問んとすれよ。胸踊りて皆しは抱も云れ
ぬ女は袖を取て押當て泣居る漸ありて長老が問ゆう和尚寮の根
容を云るよ負しきふ逼癡く。世間を思ひうんで身を投んとする人も
云えぬ。しは夫と云論をして妬まきの餘りふ人よ憂目見せんその
然ゝ。しはおりの中を新まさうれて苦しきふ。そうなれて後世を契りて身
ちをと抱ふせんと様へ行くるあやまれるは皆若氣の誤りて徹と死る
で叶さる事めぶ。一向ふ思ひ入給くる水の底をも妨じ又翁ぶ力ふあぶ

ぶき給のことなるぶ。とゆもかくふもしき助けまうきんかゝれ除ふ
ふ何の恥かゝ元事うあれべき。思ふきはを限なく浩ふ人とらくで。
女泣くいふ我は親もなく夫もまぶ定ふね身をて付れて。然ゆう
るのるすはなれそ人のそとより領りて付りる五文の金を盗人とやさう
とゝん笑ひく償ふべき極まれば暫し待て深されも甚人痛腹立く
波ぶ取隠しまく恥じとそれとこそと日毎ふ責嫌るくが恥じくもつ
くもとへ人ね身ふ責くく身を捨く甚怠りを贖うんとするあそ人ひ
に死るせ給られしと又走り出て在引居くれの性思ひぶること
ふ人の命は金ゆも換がと死物の死。ぽて絶なる金故ようふ
身を徒ふにせんと様ふ。物はさるるこそあるめ。かゝれ折ふ死神
いの物も閃屍るる物を。よく心を収めそれのせと云けく。懐の代ようふ

千曲川
伏屋の若者
女を殺ひ
却て怒る

お今を取出さんとすれども、あらぬ人のぎらるゆの板に捨ぐ〜て惜まるる。これ
代金のうちふ返して島り渡給へとそ。女ふそうそれが。余りふ思ひけれ。
ふや渡らるこびさて。却て打ち笑ひ。ちと渡声にて。扣ふ
妾ぐ命の親しと返し拝して。然るにても何方の人ぞ。あり給へ
をうらぶ此金返し。まんふ名をも兼り垂ぐやとい。ふ。その今ふ
心しも返されよと云ふも非ぞ。但し翁ハ伏屋の者とい。女藤ぬ
然れどこそ何方ぞ。一度人参ら世。板に先ぶより呂ひ陪ぐそふ長
者殿。そもしこれ。然らば戻ら世給へ。我家路ふりそれ。ひ仕
さんと参り。ものれが。世者も爰ふ跡置く戻らんハ後やこれ。ひ
渡世ふとそ。桂ふを提く立上るに。家後の庄しこそ。へれを草の中ふ探し
出して。踏切るお緒をすぐんとそれが。女ふ。ぬ取く。今まげて。ふ

お。先これを居ふそ我復ふる坂今剛の寂莫村の紐を徒はしられを匠脱て
居ぐ。紙ふり代稿ふ。ふ先ふ立く堤を下りぞ行く寂莫村のふぐれ
出ハ。西ぞ。げかれ小家ぬ。ふこ此女立苗ふ。これ妾ぐ家ふ伝り暗
立ぬ。ふ世給へ。ぬる湯一ふ。ふ。ぬんとのひぞ。貧戸を引明て入るふ。
門ぬ。ひ。彼ふれ。貧戸を立窓ぬ。ハ縄庵ふひぐれふる竹簾をかけふ。
入落暉ふ奥の方金彼ぬ。ふ。ふ涙ふ。ふ人在ふ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ぬ立ふ。ふんハけしはしられどぐれ我ふ。ふ。ハ非ぞ。今の間氣ぐ。
ふこ酒の家ふ失ぬれ。ハ方ぬ。ハ咽の乾く。ふ湯ひふ。ふ飲て行ぐ。ハ。ハ思
ひく。ふ。ふ入ふ。ふ貧子ぬ庵ぐ。ふ。ふ。女ハ囲炉裏ぬ。ハ。ハ。ハ。ハ湯涌ふ。ハ。ハ
ふれ。ハ。ハ。ハ。ハ銚子ふ酒ぬ。ハ。ハ。ハ。ハ

徒酒のみ。何ぞしも一つゆして給ふれかし。久しく振まくば酔仕ふまと訓新
ふらんが。長者ひとり打うなづいてくどくどと達ぶれ人ぞと思ひ廻ふにより。ふつと思
ひ出ぞ給行ふらんとて立んとすると強くとどめるに加法好物の酒なれば。
さのとこい辞せどして盃を挙て。注ぎうに受くる。飲るが日某毋刀自の湯
ふねを痛め氣労られ老人の。暑さ人弱ぬる附ありれば忽ち酔てもこと
酒癖發り。盃をおなら頻ふ眠られが。ずて鼾うれてさるが助ね。然
斗則老ある人の斯打寝うる事ハ粉度の爰ふも有ばれるなると。
此時その身に災害の来るべきかあてのの宿業ぞや有らんお後もこう
ど寝入られが。酒氣漸く醒く風情ふるふ驚て目とひらいてうれで
えうられ枕もいつら投捨常さん起ぶけるて牧帳の中ふ臥られよ。
あのし女ハ狂傷さらば先ず扇りて長者の跡枕をうちあふぐ居う。其老

あるて起返り。左服めく打をうり。刀腰ふさしてあじの女おいふ
ゆう思ひうらぶ食しの山酒ふ終碎く不礼ふの酩酊のてごとまる方
にゆるし給人日も暮うとあじられば暗まうさんとて居ふ出るを女う
留く今ハ夜も更ぬれり。暫ふ不までがよわどのを泊なれば独おいさんこと
仮なるべし。管蓋の塵ぞこうれハ恥しられど。三寿ふ直宿ゆきんとそ
こと形ふ儲けれ附るの一聲ふ応ふ間ふれば詫くとも寝うて聞さ
せ給人といふ実其ふるの打ちぶれ寝のとして。四隅ふ人寂静まりね。
長者もせん方なくハ思ひ煩どれど扱在るきるふれハ又らふ男志を
辱みられと翁此齢ふ至るぬく。一夜も外ふ宿しるることなられ老母
のさこそ公ふうぶ寝もせどて待おまふあ。殊ふハ宿といそんふくふ若
き寡婦の辞ふ一宿せんうこそ仮なれ慈なれ。暑き比を夜左

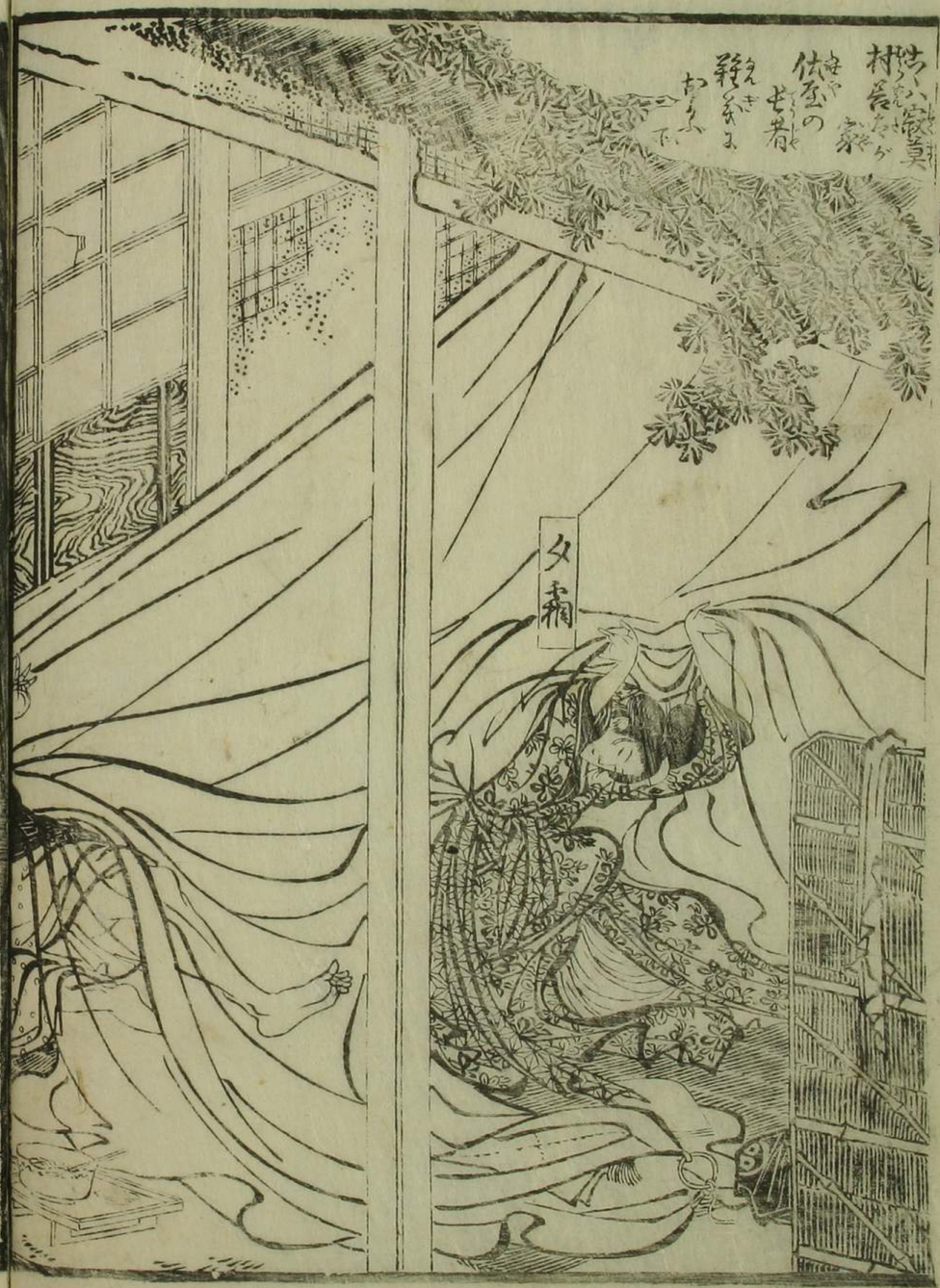
も中くによなれとて既ふ裏ゆんとて蚊帳の内をとけらくと切落と者あり。驚く此方へ出る長者の襟ぐをを掻摑んで雷のおちかゝれかうなる聲して已夫の留守をうかゞひて密事する盗人やめ。目ふ拭ひえぜんといひさま二天斗なる服差の刀の氷のやうなるを取出して胸のとゝ押當てゝ女ハ此声ゞ笑より蚊帳をかゞりぬけて脊戸の方へ逃出ね。長者ハ力とうり拭ふ強ゝねんとなりれば押居れあるゝら彼男の面を焼火の影ふるに用代の毛おつゝゝ生て。髭草ゞ束ねるが如く艷ゝとして。面の色拭めて白く。青黛ふる肉厚く骨太ふ。長高き若者なるゝ。眼猛文ふ実くて。よゝ盗人の大将軍とえゆつゝはたの。ゝ知ゝ如ゝ思ひ出れハ十年ごゝを前ふ小仙を勾引まゝ。此邊ふ悪太郎と異名とり。寂莫の善太郎

けり。氏奴刃拭ひて我を威を必ず金をいんとての杜騙なるゝ。ばよも切も突もせ。と弥ゝ驚ゝして楽ふ對ひゝ。汝ハ古ゝ類なも似ゝ甚周章ゝれ奴なる。人の行をもゝえ引ゝて立躊ゝ何ゝをいゝぞ先髮を放ゝて我いふ事ゝ聞きけ。汝も此所の者なれば我日来の行師ゝ者ゝ知ゝん拭を若き程ゝ他の妻子ふ戯言ひゝふゝ事も無ゝ法ゝ老髭ゝ何ゝふゝ騙ゝることをゝせん。をとゝりあの女を汝が妻ともちゝ。ふの夕暮ふ多曲河の堤ゝて刃を投んとゝ見れゝ刃付ゝ今を惜ゝえゝれバ甚ゝろこびとて爰ふ連ゝて盛れゝる酒ふ我も酔ゝ酔臥ゝ。今まゝハ居ゝる。かくても性疑念晴ゝぞハ汝妻ふ尋ゝ稱ふ。然ゝとも疑ゝくれ領ゝの正論ふ許へ出ゝくゝとゝるゝ引ゝぞゝれ。拭ひ行ゝう立強ゝく後悔ゝ。と中を去て動もゝゝいひ

放せば。善太大に喜び。くり〳〵とうち笑ひ。八十九十の翁まもせよ。
琴を吾先なるの如くもあれ。他妻と一所寝をして。密夫とあふぐべ
あふぐべしや。汝がとより海野殿よ入魂する事ハ我よく知ぬ。頃ろの
前よりて出さうとも。偏頗ある沙汰を行く何ぞ。汝が母の恵刀自
い女なるとも。わよ厳しく人と笑ハ。今より汝を聟に往。恵刀自ある
のさ面をいひ出せ明らかに汝を貰ひ受。徒女と新妻にて二胴の
切味をうつこと。此刀を善價よ活く。飽まで酒を呑れば。立さる腹の
居相なし。如ぶとく落名新ぜでとも。我と〳〵けるいざあ面やと。弱腕を
て引立れば。其時長者思ふやう。「此事汝母ふ申せば實否をも
弄へで。我を罵り恥しめ給ひて。自らの内外の者も洩べし。我ぞ柳下
恵よあらざれば。匠渇を知くさもやと疑ふくもいそうるうん。若ば

我のこと降ぶるかも永に恥とのふうん。結句ハ金を出して贖ふよ慈
思ひ返して。俄よ詞を変し。や善を何ぐされ。先怒をのどめて我ものを
こと気よく生よ。あふ新通りの母刀自ぞれば。はしや我命ハ乃ぶ
事なりとも。幾百出して救ふとやきれば。実よ酒よ飽んとその慈
るふば。我今その酒代を出して贖ひせんと何と音伏ふハ為ぬ。
に思ふごとのへば。吾を睨て居られ眼にをいとぐ喧く。贖うんとのふば
よく嫌く。我ハ一度ハ二十あが酒を呑れば飽くあれりとせざて。そ五斗
跡半ハ呑ふ。賠ふとも牲を赦さじとの間よ長者懐ぐ袋
を探りて。九両の小判を取出し。此袋の外とみさ一玉つ思ふ。法
施陳徒の為とへいひ。ぐるとも。母を欺きて茶種の本代とて
くの命を出させやうれ罰ぐ。ぐ思ふ。目をば見るなうんと涙

岩太
伏屋長者


夕霜

を落して海にとびこんだりと怪びあるぐら。性杜騙の身て
目くらふれば。さく。腹立聲あて。さいはされば。ひくて。徴よ。ひ。ひく。姿ヨ足
踏をあと肩先拉んで。抑出せば。長者い草履もよく履あえず。
おのれ。はあて。走り出。桂仏を垂あれば立居ろ。早く戸をと
ひく。羽ぶ干破戸の隙より。竊視れい。若太。焼火を掻出して。怒も。嬉し
ぎ。今。紙。巷へ。ぐら。鼠。帝を。ろ。れば。それ。連く。在。女。抱陰。ろ。ろ。
と。生。ぐ。これも。先の。五。の。今。紙。ぐ。ぐ。ぐ